



英語学概論

井上逸兵

はじめに

本書は、日本、およびいわゆるグローバル・コミュニケーションの視点に立った英語学の概論書である。従来の「英語学」、および「英語学概論」のたぐいの本の多くは、英米、特にアングロ・サクソンの民族語としての側面が強調され、現実社会で起こっている英語という言葉を取り巻く世界的な状況の変化が反映されたものには必ずしもなっていなかった。また、日本語で読み、学ぶものでありながら、日本的、日本語的視点で見たところの英語、英語学が論じられているものもあまり多くない。本書は、民族語としての英語という側面を踏まえながら、昨今のいわゆるグローバル化した社会における英語、リング・フランカとしての英語、非英語圏で多様化し土着化した英語、日本における英語、日本語との対照における英語の諸側面を材料としながら英語学、言語学のエッセンスを網羅的に伝えることを意図したものである。

また、本書では、コミュニケーション、テクノロジーの進化という観点、コミュニケーションの生態学とも呼ぶべき視点から、時に議論を展開している。それ自体ある意味で高度なテクノロジーとも言えるヒトの言語は、文字、印刷術、通信、マスメディア、コンピュータ、インターネットといったコミュニケーション・テクノロジーによって大きな変容を受けてきた。ことばは人々の使用の中にあつた。コミュニケーションの道具であり続けてきた。このような視点に立ったとき、「英語学概論」はおのずとこれまでとは違った形をとることになろう。現代における英語の地位と日本における英語のおかれた状況とグローバル・コミュニケーションという要請が生み出した概論の一つの形が本書であるはずだ。

2015年3月

井上逸兵

目次

はじめに	i
第 1 章 英語と英語学の背景	1
1-1 2つの「英語学」	1
1-2 本書の特徴	2
1-3 「説明の学問」としての英語学、言語学	3
1-4 本書の概要	5
参考文献・練習問題	7
第 2 章 英語の変遷	9
2-1 インド・ヨーロッパ祖語の「発見」と英語の歴史区分	9
2-2 古英語	12
2-3 中英語	13
2-4 近代英語	17
2-5 初期近代英語	17
2-6 後期近代英語	20
2-7 現代英語	21
参考文献・練習問題	22
第 3 章 英語の多様化とグローバル化——世界の英語、国際語としての英語、グローバル英語、そして日本の英語	23
3-1 世界の英語、世界の英語事情	23
3-2 国際語としての英語	27
3-3 グローバル英語（グローバル・テキスト）	30

3-4	日本における英語	36
	参考文献・練習問題	38
第4章	現代英語学・言語学の潮流	41
4-1	20世紀の言語学大三角形	41
4-2	2つの恣意性	46
4-3	「チョムスキー革命」——生成文法	51
4-4	認知言語学の誕生	55
4-5	20世紀の言語学大三角形の点と辺	60
4-6	言語学大三角形からの展開	62
	参考文献・練習問題	66
第5章	英語の音声	69
5-1	音声言語の利点	69
5-2	英語音声学と音韻論	70
5-3	音韻論	80
	参考文献・練習問題	83
第6章	英語の語彙（形態論）	85
6-1	形態論とは何か	85
6-2	形態素の分類	85
6-3	形態素による語形成	88
6-4	形態素による語の分類	94
6-5	形態素の生産性と語形成	95
	参考文献・練習問題	101
第7章	英語の文法（統語論）	103
7-1	統語論とは	103

7-2	文の構造	104
7-3	文法カテゴリー	109
	参考文献・練習問題	118
第8章	英語の意味（意味論）	121
8-1	「意味」とは何か	121
8-2	「意味」の種類	123
	参考文献・練習問題	138
第9章	指示の語用論	139
9-1	ダイクシスとは	139
9-2	ダイクシスと「人」	146
9-3	2人称代名詞の言語と文化	150
	参考文献・練習問題	153
第10章	コミュニケーションの語用論	155
10-1	会話の含意——協調の原理	156
10-2	言語行為論	165
10-3	グローバル・コミュニケーションから見た語用論の問題	173
	参考文献・練習問題	177
第11章	ポライトネス	179
11-1	ポライトネス研究とは	179
11-2	ブラウンとレヴィンソンの面目モデル	184
	参考文献・練習問題	201
第12章	相互行為の社会言語学	203
12-1	コンテキスト化の合図	203

12-2	コンテクスト観の革新	206
12-3	解釈的アプローチ	209
12-4	コミュニケーションの多層性	214
12-5	非指示的指標性	216
12-6	相互行為の社会言語学からグローバル・コミュニケーションの言語学へ	217
	参考文献・練習問題	219
第13章	談話分析	221
13-1	談話分析の2つの流れ	221
13-2	会話分析	225
	参考文献・練習問題	231
第14章	社会言語学	233
14-1	ソシユールのパラドクス	233
14-2	ミクロ社会言語学	234
14-3	グローバルとローカルな英語の多様性	240
14-4	そのほかの社会言語学的諸事象	241
	参考文献・練習問題	243
索引		245

1 英語と英語学の背景

英語学ほど誤解を受けやすい学問もそうはないだろう。何しろ中学・高校で学んできた「英語」に「学」がついているくらいだから、相当高度で難解な英語を勉強する学問だろうとか、高度に英語を操る技能を身に付ける学問だろうとか、英語学を知らないシロウトさんであればそんなふうに予想するのが常である。

残念ながら、そのような予想はほとんどハズレである。まったく違うと言ってもよい。

では、英語学とはどのような学問だろうか。

1-1 2つの「英語学」

大きく分けて、「英語学」は2つの分野を指している。この2つは重なっている部分もあるが、大きく離れて別の分野と言ってよい部分もある。

1つは「英語という言語の研究」という意味である。つまり、英語で言えば、the study of English language ということで、最近の世界の英語状況を考えると、the study of English languages と複数形にしてもよいかもしれない（本書のスタンスはそれだ）。もともとはアングロ・サクソンの民族的文化的背景を持った一民族語としての英語の研究という意味合いが強い研究もある。この意味では冒頭のシロウトさんの予想はそれほど外れてはいない。英語という言語そのものを深く探求する学問である。その成り立ちを考えたとき、当然ながら、英語という言語の背景である歴史に目を向けることは理にかな

ったことである。その実、この分野の英語学は「英語史」という色彩を強く持つことになり、過去の英語の文献をひもとき、つぶさに分析することが重要な作業となる。この分野の英語学が、英語では philology と呼ばれるゆえんである。

もう1つの「英語学」の意味するところは、「英米系の言語学」という意味である。「英米系」というのは、つまり「英米で議論されてきた伝統をくんでいる」という意味である。かつての「国語学」、現在では「日本語学」にも伝統があり、「仏語学」、「独語学」も同様に、それぞれに議論の伝統があり、扱われる事象にも違いがある。流派のようなものと考えてもそう間違っていない。それぞれの流派の言語学はそれぞれの特定の言語を対象に議論するので、「〇〇語をデータとして用いる言語学」と言ってもよいが、それだけではない。扱い方や議論の仕方にも違いがある。ここでは、それらを比較して論じることにはしないが、まずは「英米で論じられてきた伝統にある言語学」と理解しておくとういであらう。1つ目の英語学に対して、こちらの英語学は英語では linguistics と呼んでいる。この意味においては、英語学は言語学とほぼ同義と考えてよい。

もちろんそれぞれの言語が用いられる文化や国における言語学とは言いながらも、お互いに影響は与え合っているし、国際的な学術交流もあるので、それぞれに閉じた学問分野ということではない。後述する、近代言語学の父と呼ばれるソシュールはスイス人で、フランス語で論文を書いているし、アメリカで始まったチョムスキーの生成文法と呼ばれる考え方や認知言語学の視点は世界的に影響を与えている。大まかに英米で論じられ、その影響を受けてきた流れをくむ言語学というくらいに考えておこう。

1-2 > 本書の特徴

本書の1つの特徴は、この英米系の流れをくむ伝統にある議論の枠組みにおいて、一民族語としての英語のみならず、現在の世界の状況の産物でもあ

る多様な英語 (World Englishes—English の複数形に注目のこと)、さらには日本語で (おそらく多くは) 日本語話者が学ぶ英語という視点で、英語学を概観し、論ずることである。

英語という言葉は、アングロ・サクソンの民族語という側面と、その話者たちの手を離れ、世界の共通言語 (いわゆるリンガ・フランカ (lingua franca)) としての言語という側面の両方を持つ言語となった。このような規模で世界の共通語となった言語の誕生は、おそらく人類史上初めてであろう。このような特殊な事情を持った言語にはそれなりの特殊性があるはずである。

このような状況から考えうることの1つは先にも触れた英語の多様化だろう。しかし、それだけではない。コンピュータ・テクノロジーとグローバル・コミュニケーションが生み出した世界の英語のもう1つの側面は、むしろその逆だ。そのあたりは第3章で論じることになる。

さらに、本書が日本語で書かれているように、ここで英語学を学ぶ読者の皆さんは日本語話者であろうという想定から、日本語という言葉との対照で英語、ならびに英語学を学ぶことは効果的、かつ意味のあることと考える。言語系統としては遠く離れた言語同士を比較対照させて考えるという意味でも、自らの母語との対照で考えるという意味でも、日英語2つの視点を持って英語学、言語学を学ぶことは有効で、かつ実用にもつながりうるだろう。

本書の第3章以降は、主として上の linguistics という意味での英語学、言語学の視点で書かれている。一般的に言って、上の philology という視点での英語学では英語の歴史的变化が中心的な考察の対象となり、「英語史」という学問分野、科目名として論じられることが多く、後者の linguistics は現代の言語 (英語) を論じるというように区別されることが通例である。

1-3 > 「説明の学問」としての英語学、言語学

現代の言語ということは、その母語話者であれば、何の苦もなく操ってい

るはずのものである。言ってみれば、何の変哲もないものである。英語史を勉強すれば、古い時代の英語を知ることになり、英語の母語話者でも必ずしも知らない世界を見ることになる。ところが現代語の英語学であれば、子どもでもある程度の年齢なら日常的に話していることが研究対象となるので、必然的にそれがどのようなしくみになっているか、どのような働きをしているかを説明する学問という性格を帯びてくる。つまり、どちらかと言うと理論に重きが置かれる学問ということになる。

第4章でくわしく述べるが、理論的な展開には大きな流れがある。言語学の歴史の中では、言語がどのようにできているかを説明するのに、これこそがよりよい理論だと主張して特段に画期的で（あるとして）新しい言語理論が登場し、大きな流れを作るということがある。その流れを学ぶのに重要なことは、新しい理論的な大転換は、前の理論を乗り越える形で登場するということだ。これは言語学に限った話ではない。おそらくどんな学問にも当てはまることだろう。どんな理論も無からは生まれない。その土台となる考えや理論や知見が必ずある。どんな研究も何もないところからは生まれないのと同じである¹。それぞれの研究がどの先行研究を土台とし、踏み台として展開し、どのような流れの中で、どのような理論的枠組みで論じられているかを見ることは重要だ²。

これから本書で見る諸言語事象は、必ずしも言語理論の枠組みを想起させない、より基本的なものもあるが、英語学、言語学を学ぼうえて、以上のことは念頭に置きながら読み進めていただきたい。

1 それと同じ意味で、卒業論文なども含めて個々の研究がどのような研究を土台としているかは決定的に重要である。論文などで先行研究を示すのはそのためである。そして、自分の研究が後に続く同じ分野の研究をする人たちが土台とすることができるよう検証可能な形で研究することも同じ意味で重要である。学問の営みは歴史の流れの中にある共同作業なのだ。それが、単発的な（日本語で言う）エッセイや評論との違いである（もちろん、それらにも別の価値があろう）。

2 論文や授業のレポートを書くときに、参考文献をきちんと示すことはそのような理由で重要である。さらに、参考文献を示すときに、出版年を必ず書くことになっているが、それが大切である理由も明らかだろう。どちらの研究が時間的に先なのかが決定的に重要な場合があるからだ。

1-4 > 本書の概要

本書の目次を従来の英語学概論のそれと見比べてみれば、大きく異なっていることに気付くだろう。章立てだけで言うならば、第3章を除いた第8章までが、定番の英語学概論の一般的な構成である。第9章から第14章までは、一般的な概論書であれば、せいぜい2章分くらいに収めるのが普通だろう。これらは簡潔に言えば、コミュニケーションと社会の英語学、言語学である。本書ではそこを手厚くしてある。それが本書の大きな特徴であろう。

本書がよって立つ前提はこうだ。言語学の主流の考え方では、言語そのものがどのような（広い意味での）成り立ちをしているかが問題である。そして、たまたまその言語を人間はコミュニケーションに使っている、というスタンスだ。だが、本書は違う。言語はコミュニケーションの中にあつてこそその存在である。使用（use）から切り離さないところの言語、および言語的振る舞いこそが言語の本質だと考える。テクノロジーも含めた言語使用の環境、文脈、つまりはコミュニケーション状況が言語の成り立ちに大きく関わっているというスタンスである。

第2章では、簡略化した英語史を見る。具体的な言語事象は取り上げていないが、英語という言語がどのような歴史的な出来事とテクノロジーの進化と社会の変容とともに変化してきたかを概観する。第3章はグローバル化した英語がグローバル化ゆえに持つに至った2つの側面を見ることになるだろう。一見、正反対のことが表裏一体のこととして起こっていることに目を向ける。第4章はほかの章よりボリュームがあるが、20世紀の言語学の大きな流れを論じている。3つの大きな言語理論について、それを三角形に描くことでそれぞれの特徴を概観してみたい。第5章は音声学、第6章は形態論、第7章は統語論、第8章は意味論、第9章は語用論（指示と代名詞）と、このあたりは定番のラインナップで、むしろ一般的な英語学の概論書に比べると簡略版といったところだが、随所にコミュニケーション、グローバル・コミュニケーションに向けた内容をちりばめてある。第10章以降に力点が置

かれているのが、本書がほかの概論書と大きく異なるところである。コミュニケーションに視座を置き、日本、および異文化コミュニケーション、グローバル・コミュニケーションに向けた英語学を展開してみたい。コミュニケーション系言語学とも言うべき諸分野の知見を概説しながら、現代社会に生きるわれわれと英語、コミュニケーションとの関わりに実際的な問題解決の糸口を与えられるような内容になっていると思う。

英語学、言語学の諸概念やさまざまな議論は、学術的な意味で重要だ。もちろん、学問として英語学をやる以上、それはきちんと学ばねばならない。どんな世界だろうとどんな職業だろうと、基本的な知識がなければ何もできない。本書はその上に立って、これまでの英語学概論とは異なった方向に足を踏み出すためのものだ。誤解してはならないのは、これは従来の英語学概論の、コミュニケーション志向の「応用編」のようなたぐいではない。これまでとは違った視点に立つ英語学概論の、これまでとは異なった1つの形であり、そのような視点に立てば、「応用編」などではなく、まさにこれが英語学の本質だと筆者は信じる。

□ 参考文献 □

安藤貞雄，澤田治美（編）（2001）『英語学入門』開拓社.

西光義弘（編）（1999）『日英語対照による英語学概論 増補版』くろしお出版.

八木克正他（2006）『新英語学概論』英宝社.

安井稔（監修，著）（1987）『英語学概論』（現代の英語学シリーズ 1）開拓社.

■ 練習問題 ■

1. 英語史の研究がなぜ philology（文献学）と呼ばれるのかを考えよう。
2. 例えば、天文学などと言語学、英語学はどのように違うかを考えよう。
3. 英語学と日本語学とでは、対象とする言語の違いからどのような違いがあると考えられるか調べてみよう。
4. あなたの知る学問が、主として「発見の学問」と「説明の学問」のどちらに分類されるか考えてみよう。どの学問にも両方の側面があるだろうが、どういうところがそれぞれの性格を持っているかも考えよう。
5. 「グローバル・コミュニケーション」とはどのようなものか考えてみよう。